
純白で。

コナン1412

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純白で。

【Zコード】

Z5041Y

【作者名】

コナン1412

【あらすじ】

きっかけは歩美ちゃんが持ってきた割引券。ちょっとした旅行からコナンの心は変わっていく。カップリングは「哀です。

色違いワンピース

8月6日

まだ夏休みは始まつたばかりだ。

阿笠邸にて。

今日は仲良し5人組でショートケーキを食べている。

「ねえ、歩美の話聞いて！大ニユースがあるの！」

今までケーキに夢中だった元太が顔を上げる。

「おっ！なんだ、歩美。大ニユースって。うな重についてかあ？」

「違うよ元太君。歩美の大ニユースってゆーのはあ…」

と言いながら歩美は自分のバックをあさる。

そして、何やら横長の封筒を取り出した。

「じゃ～ん！ホテルの割引券！お母さんにね、『皆で行つてきなさい』って渡されたの。」

「そこのホテル、僕行つたことがあります！…とても綺麗なホテルで、近くに動物園があります！」

「わあー、すげーな！なあ、光彦。そこのホテルではうな重食えるのか？」

「…それは分かりません。」

「ねえ、コナン君も哀ちゃんもどう？皆で行こうよ。」

「ああ。俺は行けるぜ。」

「私はバス。」

「おい、灰原……」

「何？別に強制じゃないんでしょう？それに、行かない方がいいのは貴方もじやないの？いつも事件を呼んで子供達を危険な目に合わせないためにも。」

「……にやう。」

すると、急に歩美が悲しそうな顔になる。

「ええ～？ そんなあ。行こうよ哀ちゃん。コナン君も！ これ、一枚2人までで、3枚もらつたの。博士も入れて6人でぴったりだよ？勿体無いよ…。事件だって、歩美ぜんぜん気にしてないんだから！」

「こひまで言われたら、どうせ拒否権など無いのだ。

「ええ。分かったわ。行きましょう。ところでも博士には…」

「もう言つてあるよ！ 博士も一緒に行つてくれるって！」

「…そう。随分と準備がいいのね。」

「だつて、それくらいしておかないと哀ちゃんが一緒に行つてくれないと思つてたんだもん。」

「……」

「でも良かつたあー哀ちゃんが行つてくれないと、女の子は歩美1人だけになっちゃうから。楽しみだね？」

「そうね。」

— 開口 —

『ピンポーン』

朝早く、阿笠邸の玄関のチャイムがリビングに鳴り響く。ソファで珈琲を飲んでくつろいでいた哀は玄関のドアを開ける。

「あーいちゃん…おはよー！」
「おはよー。あら、随分と早いのね。」「えへへ。楽しみで走って来ちゃった。」「そう。ところで、後の3人はどうしたのかしら？」「元太君と光彦君は途中まで一緒に走ってたんだけど、疲れちゃつたみたい。もう少しで来ると想つよ。『ナン君は待ち合せしてないから知らなあい。』

「分かったわ。彼、時間までに来るかしら…」

すると、何やら楽しそうに歩美が近寄ってきた。

「哀ちゃん、昨日の……あの洋服は？」
「ああ。あれなら、明日着るわ。」「ええっ？ そんなあー。歩美は今日着て来たのに…。哀ちゃん、今着替えてきてよ！」「…………分かったわ。」

そう言って哀は地下室に着替えに行つた。

すると、勢いよく玄関のドアが開いた。

「歩美、速すぎだぜ…。」

「元太君がちやんと走らないうからですよ。」

と、元太と光彦が入ってきた。

「あれ、コナン君と灰原さんは?」

「哀ちゃんは今着替え中。コナン君まだだよ。」

「おせーな、アイツ。」

「もうそろそろ時間になつたやつよ。」

その頃、コナンは…

「……ハア。早すぎなんだよ。6時半に集合とか…。」

なんてブツブツ言いながら重いリュックを背負つて阿笠邸に向かっていた。

いつもよつと0分早く起きるのも、コナンには苦痛だったのだ。しかし夏の朝は清々しく、その空にはもう太陽が輝いていた。

『ピンポーン』

阿笠邸の田の前で「ナンはチャイムを鳴らした。
もつ、皆は来ているだろ。」

『はー。』

灰原の声だ。

何故か一瞬ドキッとした。
声を聞いただけなの。』

「あ、俺。」
(わかつてんくせ)…。)

ガチャガチャと鍵を開ける音がした。

なんとなぐドアの手前を這いつているアリを見ていた。

「そして。

少し開いたドアから見えた白い裾が…

「白?」

「ああ。歩美ちゃんか。

「おはよう歩美ちゃん……」

顔を上げながら言つていたが、途中で言葉が止まつた。
田の前に立つていたのは歩美ちゃんではなく…

「は、灰原……？」

目の前に立っている灰原はいつもと違つて、今日は膝下で半袖のワンピースだった。

純血で。

綺麗で。

眩しくて。

思わず目を細めてしまつ程。

「あ、ひ、おはよ。でも残念でした。私は吉田さんではないわ。期待していた相手と違つて悪かつたわね。」

灰原は奥へ行ってしまった。

俺は中に入りドアの鍵を閉めて、リビングへ向かった。

「あ、コナン君。おはよります。」

「コナン君おはよー。」

「おこコナン、おせーぞー。」

「悪い。ちょっと寝坊しちまつて。」

皆が俺にあいさつをしてくれたのに、灰原だけはソファに座って雑誌を読んでいる。

あ、わざわざあいさつしたんだった。

でも、何故かソワソワする。

声を掛けて欲しくて。

別に好きな訳ではないのに。

すると、歩美が近寄ってきた。

「ねえ、どお?」のワンピース。昨日、哀ちゃんと色違いで買ったんだ。歩美がピンクで、哀ちゃんは白! 2人でお揃いなんて歩美、嬉しくつて! 今日早速着てみたんだあ! 似合つ?」

歩美はクルッと回ってみせた。

ピンクの裾はチラチラと白いフリルを見せながらキレイに円を描いていった。

俺が反応に困っていると、灰原が「ちを見てクスクスと笑つていた。

「ああ。いいんじゃねえか?」

これ位の事しか言えない。

しかし、歩美は顔を真っ赤にして本当に嬉しそうだ。

「なあ、博士。コナンも来たし、もつそろそろ行かねえか?」

「わづじやのう。」

もつやるやうか。と、下ろしたリュックを再び肩に掛ける。

その後、皆の荷物を車に乗せて俺たちも車に乗った。

元太は助手席。

灰原は窓際がいいと言っていたから、窓際の席。

光彦は灰原の隣がいいらしいが、歩美ちゃんの隣でもありたいと思っているのではないか。

そして、歩美ちゃんは俺の隣がいいと言っている。

結果、左から灰原、光彦、歩美ちゃん、俺。

灰原が隣だと偽小学生同士、話が出来ると思っていたが、流石に歩美ちゃんとなると…。

騒がしい車の中、俺は窓の外を見ていた。

灰原が窓際がいいと言った訳が分かる気がする。

朝早く起きたせいか、俺はいつのまにか眠っていた。

「君――ナン君。――コナン君、着いたよ!」

「――んにゃ?――おう。もう着いたのか。」

「うん!」コナン君つたら、寝てる時にイビキかいてたよ!」

「ん、そうかあ?」

「うん!」

どれ位寝ていたのだろ?つか。

ここは何処だろ?。

都会ではない事だけは確か。

あまり人が多くはない。

車から降りて田を擦る。

ここは……動物園か。

そういうえば、光彦がホテルの近くにあるって言つてたつてことは、ホテルはもう近いのか。

博士は受け付けでチケットを買つている。

元太と歩美ちゃんと光彦は、相変わらず元気よくそちら辺を走り回つている。

灰原はとこうと。

木陰で風と戯れていた。

真っ白な鐸の広い帽子を被つて、少しヒールのある白いサンダルを履いて。

灰原の向こうには地面と青空だけ。

まるで絵になりそなぐらい、綺麗な景色で。

綺麗で。

本当に綺麗で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5041y/>

純白で。

2011年11月17日20時03分発行